



園庭の木々の紅葉も終わり、毎日のように葉を落とし、すっかり冬の装いになりました。園庭では、3歳以上の子どもたちがマラソンを通して体と心を育てています。年度後半に入り、子どもたち一人一人が成長している姿が目に見えてわかるようになってきました。前半は園庭で遊ぶことができなかつた0歳児の子どもたち、11月から全員が園外に散歩に行くようになった1歳児組。その成長の姿を保育日誌からお伝えしたいと思います。 園長  
 <つぼみ組>

園庭で、Yが「あっ、あっ」と指差し、何かを発見したと教えてくれた。「何を見つけたの?」と指さす方向を見ると、プロパンガスを積んだ車が停まっていた。「あー、車が停まっているね。お仕事の車だね。」と、二人で見ていると、Hも「なに? なに?」と興味津々にやってきた。三人で車を見送ると、今度はHが葉っぱを見つけ、「はっぱ! はっぱ!」と話した。「本当だね。葉っぱがたくさんあるね。」と見ながら、「こっちにも葉っぱがあるよ」と隅に生えている草の葉っぱを指差した。YもHも一緒にしゃがんで葉っぱを見ていると、MやAも集まってきた。「葉っぱがたくさんあるよ。」と知らせると、みんな身を乗り出すように見ている。幹の根元の枯葉の上にダンゴムシを見つけ、「ほら、ダンゴムシもいたよ。」と保育者の手のひらにのせて見せた。丸まったダンゴムシを触ろうとしていたMやHも体が伸び、足が動くのを見ると、少し手を引っ込めてじっと見つめていた。ダンゴムシが動き始めると、「おーおー」とMはとても驚き、声を上げていた。Yの発見に始まり、一人二人と、興味を持った子が増えていった。ダンゴムシを見つけた時、Hが声も出さずにじっと見ていたのが印象的であった。園庭遊びにも慣れ、様々な場所に興味を持ち、挑戦したり見たりすることができるようになった。どんな物を見て、何を楽しんでいるか一緒に共感していけるようによく見ていきたいと思う。

<ちゅうりっぷ組>

今日はゴルフ練習場跡地近くの野原に行ってみた。土手に到着し「いつもとは違うほうへ行ってみようか? 何かがあるかな?」声を掛けるとRが「行く! 何かがあるかな。」とワクワクしながら答えた。野原では草花を摘む子、バッタがいることに気づいて探し始める子など、それぞれ楽しんでいる姿が見られた。そんな中、Mは野原から土手道までの斜面を上りはじめた。看護学校の実習生が危ないと思ったのか下ろそうとしてくれたが、上ろうとしていることを話し見守ってもらうことにした。Mは何とか上まで上ることができた。Mの行動に驚いたが、上ることができたことに更に驚いてしまった。上ることができた時、「Mちゃん、上れたね。すごいね。」と声をかけたが、今度は笑顔で土手道を走り始めて自由に動いていた。言葉のやり取りはなかったが、表情や行動を見ていると、とても生き生きして「楽しい」という思いが伝わってきた。Mが登っているのを見て他の子どもも登り始めた。今まで上り下りしていた土手の斜面より傾斜が急だったので滑り落ちてしまったり、途中で諦めてしまったりする子もいたが、ほとんどの子が登ることに挑戦していた。斜面を上って遊ぶことは想定していなかったが、子どもたちにとっては楽しい遊びの一つなのだ改めて感じることもできた。斜面を上ったり下りたりして遊ぶ時は、傍らで見守り怪我に気をつけていきたい。

